

第二編 皇道と哲学

第一 『成る』の立場

一

古事記の冒頭に、天地初発の時、高天原に「成りませる」神の御名は天之御中主神とあり更に更につぎ／＼に顕はれる神々を皆、「成る」と言ひ、伊邪那岐神伊邪那美神からは「生む」と「成る」とで顕はしてをり、古事記は神も人もよろづの物も皆「生む」と「成る」とで一貫されてをることとはどなたも直ぐ気付かれる所である。此の故に日本思想は生成思想なりと呼ばれるのであるが、宇宙発願の天之御中主神も亦成りませる神と最初に記されてをることは、「成る」が宇宙観、国家観、人生観の起点を語り、又真理探究の根本的立場たるべきを示すものであり、「成る」の持つ意義が如何に深く重大なものであるか、見逃すべからざるものがある。「成る」は吾等の祖先民族全体の生活の根本的立場であつたのであり、従つて又吾等祖先は、その思想の根柢を「成る」で現はしたものと云ふことが出来るので

ある。

然るに「成る」の立場は従来の哲学的思惟や科学的論理によつて説明することを許さぬ行的境地である為に、次第に論理的整備を誇る学問から見離され、外来の存在思想即ち「在る」の立場に置き換へられて来たのである。思惟の方法、或は学問研究の方法は何処でも共通であり、所謂科学的方法以外には真理を求める方法はないかの如くに思はれて来、遂には「成る」自体を同様の方法によつて、その意義を定め解釈しえたものと心得て満足してをつたのであるから、古事記の真精神の理解される筈がなかつたのである。

外国思想は「在る」を基底とし、学問も「我在り」と言ふ所から出発して、多数存在物を分析して共通点を選び出したものを尺度とし、斯様に抽象された尺度を次第に高次に遡つて万有の創造者たる神の存在を觀念に画き出したのである。宇宙創造神は宇宙万有から超在して宇宙の外に「在はす」のである。宇宙の外から宇宙万有を造つたものと考えてゐる。造るものと造られるものと対立し、学問に於ても研究するものと研究されるものと対立するに到つてゐる。客観に「在る」物なり現象なりの総てを、それらから離れた一の「在る」主観的立場から観察するのである。研究される所のは総て客観化されて対象となり、研究する人間は「我在り」と言ふ対象の外に立つわけである。諸諸の現象がさうであるばかりでなく、我自身の研究も亦、我自身を客観に在るものとして対象化し、別の我たる主観的「在る」の立場から眺めて我を知つたことにするのが存在思想から発展した従来の科学といふものである。更に先にも述べた如く生成の現象即ち「成る」をも成るの外の「在る」立場から観察して事足れりとして来たわけであるが、何ぞ知らん「成る」は科学的研究の対象として主客分離し得る存在と云ふが如きものではないのである。

「成る」は「成る」立場に入つて始めて体得しうる境地を言ひ、「成る」によつてのみ真の我が在り、我を知ること

も出来るのである。学問の根柢たるべき「成る」は理論的説明によつては到達することが出来ず、行を通してのみ達し得る、境地たることを知り、此の境地を得ずば真理を求むる学問として全きを得ぬことを悟らねばならぬ。

二

古事記を科学的に解剖して国体を引き出さんとする試みは最近益々盛になつてをるが、結局此の方法は生命ある国体を死骸化して把握せんとする立場から離れえず、本居説以上に出ることは望まれないのである。次に同じ「在る」の立場に立ちながら、生命を認め、之を死骸によつて説明せんとする学者がある。「成る」の立場が理論的説明を拒否し、「在る」の立場にある人達には全く非合理そのものの如く思はれるので、合理によつて何とか「成る」を説明して見んとする努力の顯はれである。彼等は先人の言行その他あらゆる客観的資料を集めて、行とはかう云ふものであらうといふ想定に達し、行の外から行を説かんとするので、結局行をやらずに行をわかつたことにする「在る」の立場に陥るのである。科学の様に知態のみを真とせず、知態より行態へ入らんとするのであるが徒勞に終る外ないものである。

行に於ては一の予想された境地に向つて入つて行くのではないのである。直霊の境地はかう云ふものであると説明を聴かせられ、又その境地を予定して行に入るのではない。直霊は想定せられうる靈魂ではない。吾等は知態により行態を歪曲してはならぬのである。従つてたとへ自分が行をやつておるにしても、人が行の境地を説くのを土台にして行を論じてをるやうでは、未だ知態に止つて真の「成る」の境地を体得したものと言へないのである。

吾等は古事記を読んで先人未踏の境地に入つて国体と共に生き、国体を闡明せんとするには、どうしても新しい方

法を用ひねばならぬことが以上の説明でおわかりになると思ふ。「成る」の立場は死んでゐる文献から、言靈を生かし、器教を生かし、遂に自ら古事記を書いた境地に入り、宇宙万有同根一体の生命を呼吸するのである。「在る」の立場よりする知は如何に集積するも一の行をさへなし得ない。如何に思索するも知態は行態たり得ない。直靈を発動せしめ得ない。吾等は須く「在る」の立場を去り、「成る」の立場より学問するやうに努力せねばならないのである。

三

「成る」の立場は先づ身を清める所から始まる。総てを天照大御神に捧げまつて、全くその包容の中に入り知情意の澄みきつた褻、祓、鎮魂の境地を得なければならぬ。「成る」の境地は斯様な人のみが語り得る所である。

前述の如く吾等は、砂糖をなめずに甘いと云ふ立場を否定し、更に砂糖はかういふやうな甘さだと他のものによつて説明する立場も否定したのである。吾等の「成る」の立場は我と砂糖と一体に成る境地より外に悟りも語りも出来ないものである。此処では斯様な境地が言靈としての「成る」に生きて伝へられてをることを述べ、進んで「成る」の境地より立てらるべき学問の方向を見直して行きたいと思ふ。

「ナ」と云ふのは風が風ぐ波が風ぐの「ナ」で解る様に和らぐ意味であり、結局調和の境地を顯はす言靈である。「ル」は集るとか、来るとか、取るとかいふ場合の「ル」で吸収集結する境地を顯はしてゐる。生魂が足魂となり、玉留魂となつて直靈が開展する境地を顯はしてをる訳である。自分の本性が可能的にして然も必然的な生成に向つて養分を吸収し成長純熟すると共に、万有と完全に調和成熟して生成発展してをるのが「成る」と云ふことに顯はされてゐる。

古事記に、「塩こをろく／＼に画き鳴して」と「成る」と一如の「鳴る」が用ひられ、又「八雷神成りをりき」と「鳴る」と一如の「成る」が用ひられてあるが、漢字で異なる意味も、日本の言靈からは同じで、物の成熟する時は必ず鳴動することが行の境地に入れば直ぐわかるのである。その他大祓詞には「生る」とあり、日本紀には「化る」「為る」等も用ひられてゐるが、之を漢字の意味から推測して「ナル」の境地を誤つてはならぬ。「成る」には表から見れば生産、変化、鳴動、成熟、成就といふやうなことが考へられるが、そのみによつて「成る」の境地を解き得たと思つてはならぬことは繰返し述べた通りである。

万有が夫々本性を發揮し、万有一体の調和的生成をなしてをるのが宇宙自然の理である。中心即全体の天之御中主神は「成る」の起点であり、万有は天之御中主神の分派として高御魂と発顯し、神魂と還元して常に秩序整然たる調和的生成の宇宙を顯現してゐる。

吾等は天之御中主神の分派として成り出でたるが故に常に天之御中主神と一体に成る境地に立つて万有と調和し一体の生成をなし得るのであるが、斯様な真に現実の一体の外に立つて宇宙の現実を觀察せんとした従来の学問は、現実的であるとか、現実を土台にしなければ何も出来ぬ如くにうそぶきながら、似而非現実と理想との不調和に絶望するのである。「成る」の立場からは現実と理想とは常に一体の調和にあり、必然と可能とも亦調和し、成るが上に成らんとして不調和が無く従つて絶望することを知らないのである。「在る」の立場は現実の外に理想を求める結果に陥り、可能と必然とを調和させることが出来ない。斯様な不調和は絶望を意味し、死に導く学問と言はねばならぬのである。

次に「成る」境地は客体と一体になるのであるから、別に尺度を必要としない。「在る」立場は宇宙を見るに、宇宙

の外に立つが故に、宇宙の内容とは別の空間とか時間とか云ふ尺度によつて当筈める方法を取るが、日本では高天原に成ると言つて、靈の充満し鳴動生成するのを宇宙だと体得してゐる。「タカ」は縦に昇り、「ハラ」は横に張り、「ミ」は靈であり、靈の充満し縦横無尽に活躍する内容から宇宙を顯はすのである。「成る」は時間的立場で、「在る」は空間的立場であると即断し勝ちであるが、靈の発動が時間とも「成り」空間とも「成る」のであつて、時間空間の概念を先にもつてくるのが「在る」の立場で、天之御中主神の発顯から時間も空間も生れることを知るのが「成る」の立場である。

又吾等は客觀の対象を主觀の靈として包容し、主客一体に成る。之は眞の「知る」境地であり、行態知態の合一である。主觀が客觀の包容に欠け、客觀の本性を眞に知ることが出来ず却て客觀が主觀を支配するに到ることを「つかれる」と云ひ、所謂神憑り、行者流に往々見られるのは之である。主觀がその外に客觀を支配するのを「うしはく」と云ひ、「在る」の立場が之である。行のみを眞とし、或は知のみを眞とすれば主觀客觀の調和を失つて似而非行、似而非知に陥る。主客同根一体の交流は「成る」立場によつて得られ、「知る」「知らず」の眞の意義も之によりおかりになると思ふ。

四

「成る」の境地は成れるもののみが成りうる境地であり、「成る」境地に於ける靈の派出が「生む」行為となる。禊の境地が進むと吾等は「うけひ」と云ふことが出来るやうになるが、之は子を「生む」境地である。天照大御神と須佐之男命との「うけひ」の神話は斯様な境地に入つて始めて解ける所であり、又岐美二神が山川草木、禽獸虫魚をお

生みになる神話も、少しの不合理も無しに解決するのである。さうして吾等は生んだもののみに生命を伝えることが出来るのである。「在る」の学問は「在るもの」として把握されたものを積み重ねて行く学問であり、次第に大きな文化を造り上げるに到つてをるけれども、生命を生むことの出来ぬ立場に立つてゐる。如何に科学は進歩しても、永久に「造る」文化は生命を持たないのであり、血を生むことが出来ない。然るに「成る」文化は「造る」ことに於ては遅れたけれども、生命を「生む」学問の樹立に向つてゐる。今まで生命を生むことの出来ぬ科学のみを眞実とし、生命を生むことの出来る祖先伝来の学問を忘れてゐたと云ふことは誠に不思議な氣がするのである。「成る」の境地を余り問題にしてゐない今の多くの人達には、子を生むことが出来るなどといふものだから、尚更、行を馬鹿にして子を生む眞實な子を生むことの出来ない学問で究明しようとすることは果して正しいことかどうか。兎も角、従来の学問の立場と全く異なる日本固有の生成的立場の学問の成立しうべき可能だけでも認めなければならぬと思ふ。

従来、日本人とはどういふことであるか、日本人であるといふことばかり探究して来たのであるが、斯様な方法で分析綜合したのでは死んだ日本人は得られても、生きた日本人は得られないことがわかつたのである。お互に日本人であることがわかつて、それだけでは何の団結も何の力も生れて来ない。お互が眞に日本人に成つてをるかどうかが問題なのである。

日本人として生れてをるのだから、日本人に成つてをるにきまつてゐると云ふのは正しい。その通り、日本人であることよりも日本人として生れてをることの方が先である。吾等は生れてをるが故に、米を喰ひ、物事を考へ、仕事をする事が出来るのであるが、斯様になしうるのは日本人に成る為であり、日本を生む為であつて、吾等が存在し

てをるが故に或は存在せんが為のものではないわけである。

「成る」は必然と可能との調和的生成を云ふのであることは前にも述べたが、日本人として生れたと云ふ必然と、日本人としての本性を発揮することが出来ると云ふ可能とが一体に成る所に万有と調和して生きて行くことが出来るのである。然るに日本人として仕方なしに生れたと云ふ必然と、日本人としての本性を発揮せずと済ますと云ふ可能とは調和しないで絶望に陥るのである。日本人として生れたものが日本人で「なく成らう」とすれば調和を失ひ絶望に陥るのは当然である。日本人が日本人に成るとは、日本人として生れた必然と、日本人としての本性を発揮することが出来ると云ふ可能との一致、即ち成るが上に成らしめることであり、神ながらの道に外ならぬのである。

斯くして日本人であることを分析する学問よりも、日本人に成ることに努力する学問がどれ程大切であるか判然として来ると思ふ。

古事記を読めば吾等の祖先は「成る」立場に生活し、「成る」を思想の根柢として、生命ある文化を生みなしてゐたことが明かなのである。吾等も日本人に「成る」の立場に還らなければならぬ。

吾等は「まこと」を出せばよいのである。君民一体に成り切るのである。八絃を宇となさねばならぬのである。世界の動乱は吾等が「成つてなかつた」から起つたのである。他に責任を求めたり、他に責任を転嫁したりするのは、一体的調和を知らぬ外国流である。「成る」立場は総てを自己の責任とし、総てと一体になるから必ず誰でもついて来る。「成つてない」人間が一億一心を説いても人はついて来ない。如何にして一億一心になるか、如何にして八絃一字に成るかは、頭の中で考へて出来る問題とは訳が違ふのである。八絃一字に成り得ぬなら、一人一人皆の責任である。合理不合理で道義を論ずるのは止めにして、真直ぐ「成る」の境地を体験し、体得体顯する度量を持たねばな

らぬと思ふ。吾等は祓戸大神と成つて宇宙万有の穢れを祓ふことが出来る。天之御中主神と一体に成り、その稜威に乗つて吾等の靈魂が発動し万有の穢れを祓ふのである。かう云ふ風にしたら病氣をなほせるといふやうな尺度を考へてからやるのではない。吾等の靈魂が自ら尺度を実現するのであり、之を靈乗と云ひ、吾等が万有と一体になつて万有を稔らせることが出来るのを「生む」と云ひ、又産業（成栄え）と云ふのである。始めから八絃を宇として生れてゐる万有を成るが上に成り栄えさせるのが、八絃一字の実現であると云はねばならぬ。（昭和十六年十二月）

第二「知る」の学問

一

我々が生きてをる世界の眞実は、「ある」と云ふ存在として把握せらるべきでなく、「なる」と云ふ万有一体の調和的生成の立場から理解せられなければならぬことは既に繰返し説いた所である。宇宙万有が夫々存在として限定せられ得るものでないことは、古事記が「高天原に成る」と云つて宇宙の生成的把握を垂示し、之によつて始めて宇宙眞理を完全に展開するを得てをることによつても、悟られねばならぬ所である。即ち我々は宇宙を「ある」物として、我の外に對象化し、宇宙とは時間と空間とであると云ふやうに抽象的觀念を造り出すことばかりを学問と考へてはならぬのである。斯様な立場は我と学問と対立し、現実を抽象的觀念に置き換へ、生命を死骸として把握する所の「うしはく」の学問に陥らざるを得ないのである。宇宙は我々の外に「在る」ものではなく、又単に我々の知識として「うしはく」ことの出来るものではない。我々は宇宙の中に生きてをるし、我々も亦宇宙を構成する分子に外ならない。従つて我々は宇宙と一体に「成る」ことが出来なければ宇宙を「知る」と云ふことも出来ないのである。即ち我々は外から尺度を以て宇宙を測るのでなく、宇宙の眞只中から内容たる靈魂を以て「高天原に成る」ことが出来て始めて宇宙を知ることが出来る訳である。宇宙の眞実の体得は一人一人皆が高天原に成るより外にはない。外から抽象して得た觀念は如何に理論的に整備されても、生きた宇宙はそこからは出て来ないのである。「なる」は外から眺め

て説き得る所のものではなく、内に入つて始めて知り得る境地である。生きた学問は「成る」境地から始められねばならぬ。我々は「日本人である」と云ふ存在を對象として研究しても日本人の抽象概念しか得られず生きた日本人は出て来ないのであり、「日本人である」だけなら何処に転がつてゐてもよいので極くつまらぬ。我々自身が「日本人になる」と云ふ現実に立たなければならぬ。さうして始めて眞に「日本人を知る学問」が成立する次第である。支那の文字や西洋流の翻訳論から、知と行とを分けて考へ、「ある」を知に當倣め、「なる」を行に當倣めて考へるのは誤りである。「ある」は「なる」の一段階を限定するに過ぎず、「成る」の体験、「知る」の体得、「行ふ」の体現の三位一体の境地の発願のみが学問的眞実を語り得るものに外ならない。

二

記紀の海幸彦山幸彦の物語に於て我々は「知る」の学問を深く味はふことが出来る。海幸彦としての火照命と、山幸彦としての火遠理命とが、其の幸を互に交換して海幸彦は弓箭を持つて山に行き、山幸彦は鉤を持つて海に行くのであるが、共に獲物が無い。殊に山幸彦は一の魚も釣れない中に鉤を失はれてしまふのである。弓箭も鉤もその使用方は御二人とも理論としては知つて居られ、獲物のとり方も理論としては知つて居られるのであるが、此の理論は弓箭の抽象觀念であり、鉤の抽象觀念である。弓箭も鉤も未だ道具として、海幸彦、山幸彦にうしはかれて対立してゐるのであつて眞に海幸彦が山幸彦に成り、山幸彦が海幸彦に成る所の「知る」の学問が出来てゐなかつたわけである。器物が道具と考へられる間は、人と器物とは別のものとして対立してをり成功することは出来ないのである。器物が靈魂となつて人の靈魂と同根一体の交流あり、人と器物と眞に一体に成ることが出来れば、自ら器物はその本性

を發露して成功を修めることが出来るのである。器物が自分に成り、自分が器物に成るのである。斯様に弓箭を自分の外に主人として身につけることを「うしはく」と云ひ、弓箭が自分の靈魂として包容され、自分の手となり足となるのが「しる」である。自分の外に「ある」のが「うしはく」で、自分の内に「なる」のが「知る」である。深く知ることが深く愛することである。海幸彦は山幸彦の造つた鈎では愛することが出来ない。自分の鈎をどうしても返せと仰せられるのも無理がない所である。

今日の例で云へば、役者ほど自分の芸に苦勞してゐるものは少く、従つて役者ほど自分の芸を「知る」學問をやつてゐるものは少いのである。役者が自分の配役の人物と対立して俺が此の役をやるのだと云ふ氣持のある間はまだ役者が芸をやつてゐるのであつて芝居としては成つてないのである。役者が配役の人物に成りきる所に神技が生れるものと云はねばならぬ。

斯様にして良い医者と言ふのは、理論を沢山知つてゐると云ふ標準によつてはきまらないのである。医学博士必ずしも医者に非ずで、医学の理論と患者とが別々に考へられて、理論によつて患者の病氣を勝手にきめられたのではかなはないのである。患者と一体に成り、その病源を知つて診断を誤らない医者でなければならぬ。「うしはく」抽象的理論よりも「知る」の具体的診断を誤らぬ所に医者資格が出て来るのである。

三

「うしはく」學問は眞実の外に抽象せられた觀念を立て、斯様な觀念を尺度として逆に眞実を測定する誤謬に陥るのである。生成發展が眞実ならば此の發展を信ずるのに、外に立てられた數量的尺度の進展が計算せられなければ満

足しないわけである。既に現実のものと尺度とが対立するのみならず、斯様な尺度によつて測られた過去と現在とが數量的に異なることによつて過去と現在とも対立する別のものと考へるに至るのである。「在る」の立場から見ると外国の學問では、子供が大人に成る場合にも、其の年齢、体格、容貌等の外形的尺度を基準にするが故に別の人間であると考へる誤謬を犯すのである。其の子供と大人とが同じ人間であると云ふことは外国の學問からは絶対に説明出来ない。皆さんが「子供と大人とが何故同じ人間であるか」と聞かれて何によつてどう説明するか、從來習つてゐる學問の上からでは決して答へられないと思ふ。

「異なる」と云ふことを支那の文字や西洋の學問に把はれて「ある」の立場から考へると、必ず二以上の存在物の対立を前提としなければ解けないのであるが、日本語の「ことなる」は始めから対立のない一のものゝ凝り止り成る（事成る）と云ふ「一体に成るの立場」から生れた言靈で、存在の対立でなく一体の生成を顯はしてゐる。宇宙万有を顯はす八百万神達は總て一の天之御中主神から「事成れる」ものであり、「異なる」自体が対立で無く、一体を顯はしてゐるわけである。始めから一つのものの生成發展を「ことなる」と云ふので、過去のものと現在のものとは別に二つあるのではなく同じもの内から成る發展である。外から見ると二つであるが、内から見ると一つである。即ち我々は外から「在る」の對立的立場に立つてものの異同をきめることが誤りであることを知り、内から「成る」の一体的立場に立つて「異なる」の眞義に徹し、過去がそのまゝ現在となり未來となることを知り、子供がそのまゝ大人となることを知り、進んで万有の對立を去つて之と一体になり万有を眞に知るの學問の開かれるのは「成る」の立場からであることがはつきりせられたと思ふ。我々が万有に異ると云ふことは、我々が万有に凝り止り成ることが出来ると云ふことであることが明かにされたのである。

そこで我々が万有と一体になり、真に知り行ふ所の学問に入る為には、先づ既に外に「うしはける」尺度を棄て、觀念を棄てて素樸な素直な気持で内から入り込まねばならない。対立を無くなさなければ真に知ることが出来ないのであり、之は伊邪那岐大神が身につけた総てのものを棄てていつて瞑する境地である。

「知る」の学問に於ける鍊成熟達は、数字によつて示される外形的尺度の進展を願はして来ないのである。此の頃、日本でも行はれる様になつた西洋の運動競技は尺度の上に成立し尺度の進展を以て進歩と心得る西洋思想をよく現はしてをり、例へば百米と云ふ距離によつて限定された走路を何秒間で走るか、その秒数を短縮することによつて競技者の進歩を認めんとするのである。その他如何なる競技も皆尺度が無ければ成り立たぬやうになつてゐるのであるが、進歩を二つ以上のものの比較として見ない日本古来の武道にあつては尺度によつて強さを測定することが出来ないやうになつてゐる。斯様な尺度的進歩を当てにせず、太刀と対立せず相手とも対立せず、総てと一体に成つて唯々己の全靈魂を發揮するのみである。神の稜威を武に発顯することのみを求めて鍛鍊し、神人合一して神武を發揮するのである。対立者を予想してそれより強くならうと云ふ武ではない。相手を生かし相手と共に強くなる、対立のない、神と一体に成る武である。従つて皆神の流れを汲んだ武であり、神の稜威を発顯する武である。強弱を測る尺度は無く、唯々神に成つてゐるか、神に成つてゐないかが問題となるのみである。外に願はれる所に武の進展を求めるのではなく、内に深く真髓に徹せんとする武である。人間の造つた尺度で測られるやうな所に神は居られない。人が全く神に帰一する所に自づと神は成りますのである。強者に対しようが弱者に対しようが、広い所であれ狭い所であれ、雨が降らうが風が吹かうが、夜であれ昼であれ、病氣の時であらうが、健康の時であらうが、一切の外形的尺度に関わりなく、何時如何なる場合にも發揚せられなければならぬ「待つたなし」の神武が真の目標である。

数量的尺度によつて強弱を測る誤りは今次の大東亜戦争によつて明かにされてをる通りで、数字の上で如何に優秀な飛行機も乗手の道具としてうしはかれてゐたのでは何の役にも立たない。乗手と一体に成り得ない武器や速度は数字の上のみ優秀であつても駄目なのである。日本人に最もふさはしい、我々と一体になりうる飛行機を造らなければならぬ。斯様にして日本軍は到る処で神武を發揚することが出来てゐるわけである。我々は何時如何なる場合にも神技を發揚することの出来る神に「成る」の学問をし、常に神の境地に立たなければやまぬのである。

四

以上に於て「知る」の学問は、あらゆる既成の觀念尺度を棄て去り、即ち万有との対立を去つて万有と一体となる神の境地に入り、神の稜威を発顯する神秘に達せんとするものであることが明かになつたと思ふ。斯様にして如何なる場合にも我々の全靈魂を發揮しうる夫々の道の真髓に達せる境地を聖と云ふ。聖とは「靈を知る」「ひじり」である。「知る」の学問は結局、靈を知る為に神を学ぶわけである。「靈削ぎ」(瞑)「靈知り」(聖)「靈出づ」(稜威)は此の学問の真髓を語る言靈で入つて見て始めてわかる一の「成る」の發展に外ならない。

こゝで我々は尺度はものを外から見る基準ではなく、ものの中から尺度が實現されるものであることに気付かねばならぬのである。尺度がものをきめるのではなく、ものが尺度を表はすのである。科学の法則や哲学の原理に当簞めることの出来ないものは虚偽だとして来た従来の「ある」の立場は根本的に反省し直されなければならぬのである。国体は科学的証明や哲学的思惟によつて立証せられるが如き「存在」では無く、常に生き／＼と成ります「生成」である。我が皇国体は科学的国体や哲学的国体でなくて結構である。尺度によつて存在を限定するので無く、生成から

尺度を「事割る」のが真の理論である。今日の統制経済と云ふのも、全然法律だけによつて経済を支配し動かさうとしてみようまく行くわけがない。経済の自然の動きと一体になつて、人と物との調和の方式として統制も考へられなければならないであらう。

又従来^レの学校教育は所謂劃一教育であつて、男も女も、誰も彼も一定の型にはめ、一定の型の人間に仕立てて行くのが根本方針であつたのである。人間は一定の尺度によつて其の能力を計られ得る機械的存在物とされて来る。人間の本性たる神性を顕はすことは完全に拒否されるのである。知識をうしはく度合によつて人間の能力を定め各々の本性を発揮する為の錬成は省みられなかつたのである。

然るに「靈止」(人)は各々「異る」本性を発揮すべく生れて来るのである。其の各自の天分を存分に伸ばしてやるのが教育であるべき筈で、各自持つべき「職業」を「知る」の学問、「知る」の錬成が先づなされ、理論は二の次でなければならぬ。各自の職業に神性を発揮するの錬成が教育である。神技は如何なる職業からも生み出される。武道ばかりが神流であるのみでなく、文の道も亦神習ふ道である。文章を書くのが職業なら、文章の上に神が顕はれて来なければならぬ。尺度によつて進歩のきめられる相対的進歩を当にするものは尺度の進歩と共に棄て去らなければならぬ。速度を基準にすれば駕籠は人力車に代られ、人力車は自動車に代られる。尺度を基準にしない芸術は無窮の生命を保ち、所謂進歩とは関係なく、雪舟の画を越す神技は今なほ生れない。記紀神典は神を顕はすが故に、又無窮の生命を持つ。我々は如何なる職業に於ても此の事あるを信ずるのである。

古事記、日本紀等の古典は読まれる通り、「成る」の立場から書かれ、語部は禊もし、祓もし、鎮魂もして神の境地から成り出でた言霊を語り伝へてをるのである。斯様な神典を今の学問を尺度として勝手に解釈出来るわけがな

い。神典は神典の語るまゝ、我々も神の境地に入つて体得しなければならぬ。神の稜威の発顯たる神典に嘘偽のあらう筈がない。我々は古事記日本紀等の古典の絶対神聖を確信し、之を解くのに亦神性を発揮すべく努めると共に、斯様な立場から神典を解釈し、国体明徴に邁進する士の輩出を望んでやまぬものである。(昭和十七年四月)

第三 「行ふ」自己

— 宇宙と我 —

一

今此処で「自己」と言ひ、「我」と言ふ、書く「私」は、読む「あなた」でなければならぬ。読む「あなた」は文章の中の「行ふ」自己でなければならぬ。「行ふ」自己は漠然と人類一般から抽象せられた個人を指す「自己」であつてはならない。「行ふ」自己は他の人であつてもよい自己ではない。誰であつてもよい自己ではない。生き行ふ自己は我自身の体得以外に求められざる自己でなければならぬ。斬れば血の出る自己でなければならぬ。従来^{従来}の学問によつて体系づけられた自己は、生き行ふ自己の外に造られた抽象的自己であり、死んだ自己であり、行はざる自己であつた。

我々は宇宙の中に生れ、宇宙の中に行ひ、宇宙の中に死ぬ。斯様な宇宙の中に行ふ自己の立場から、宇宙の中に行ふ自己を体现する学問は従来一つも体系づけられて来てゐない。従来^{従来}の学問は自己を、そこに於て生れ、そこに於て行ひ、そこに於て死ぬ宇宙から引離し、宇宙から独立超越して、そこに於て生れるのでもなく、そこに於て行ふののでもなく、そこに於て死ぬのでもない自己が自己となり、自己がその中に成る宇宙は、斯様な自己の対象界となり、自己がその中に死なずともよい宇宙が学問的に普遍妥当性ある宇宙となり終つてゐたのである。宇宙と我とは二つの別

の世界を造り、宇宙の中にある我と、宇宙の外から見る我とも別の我となつて対立せざるを得ない。部分が集合して全体を構成するけれども、部分は全体の外から之に対立することが出来、部分の行為は全体の中に於ける行為とならない關係が擬制せられるのである。此の關係は近世法律文化の華と謂はれる法人論に於て結晶し、偉大なる觀念的實在を横行させるに至つたけれども、それは又行はざる自己の終焉を物語る外の何ものでもない。独立せる人格者の幾人かが集つて法人を組織する場合、法人は觀念的独立人格者として構成員たる社員^{社員}の人格と対立するに至る。法人を構成する社員は、法人と對等の人格に於て法人に対し公益權と自益權とを有すると云ふ。公益權とは法人の爲にする權利であり、例へば總會に於ける議決權の如きもので、之は法人の中に於て「行ふ」自己が顯現するのであるが、之に氣付いた或學者は公益權は法人に対する權利では無く、法人の中に於ける地位若しくは身分であると言つてをるがその通りである。自益權は利益配當請求權の如く、法人と法人の中に居るべき社員とが完全に対立するに至る。全体と部分とが二つの別の世界となつて対立するわけである。部分が全体の中に於て「行はざる」自己の世界、觀念の世界のみに於て可能かも知れないが、「行ふ」自己の世界、眞実の世界に於ては理解しえられぬ所である。従来、斯様な觀念的自己が文化の花形として所謂實在であつたのである。自己が環境の生成の中に融け込んで享益する、我が国古来の入會關係^{いあひ}に於ては全体と部分とが權利義務の關係によつて対立するものでないことは、既に學者の明かにする所で、法人を實踐界に實現する場合に入會權の如き關係となつて現はれることが期待せられなければならない。

入會權に於ては各成員の個別權は全体の中に行はれ、全体の利益と各成員の利益とが結合し一致する範圍内に於てのみ個別權の行使が許され、個人と全体との対立は無く個人は全体の中に持分^{もちぶん}を持つのみである。

斯様にして國家と國民とを對立的權利義務關係に於て見る國家法人論の誤りは最早説くまでもないことである。國

家も法も観念的實在ではなく、自己がその中に於て現実に「乗つて」行ふものが皇国の「のり」でなければならぬ筈である。

二

古人は「百聞は一見に如かず」と云ふ。生きる自己の眞実に於ては、百の考へは一の行ひに及ばない。眞実でないことを考へることは出来るが、眞実でないことを行ふことは出来ない筈である。行はざることは知識にはなるが、眞実にはならないのでなければならぬ。行はざる自己は幾つでも考へることが出来るかもしれないが、宇宙の中に行ふ自己に於ては、宇宙も自己も一つに成るのが眞実であつて、二つになつたことがない。眞実の学問は斯様な宇宙の中に生き行ひ死ぬ自己の体現せらるゝ体系でなければならず、学問それ自体斬れば血の出る生命あるものでなければならぬのである。

自己は又宇宙の中の国に生れ、国の中の家に生れる人である。我々は先づ家の中に「行ふ」自己となる。従つて家の学問としての眞実性は、自己の行ふ家から体現せられなければならない。甲の家は斯様であり、乙の家は斯様である、自己のそこに於て行はざる家を外から眺めて抽象し、家とは従つて婚姻共同態であるとか、消費共同態であるとか言はれる。それは観念の家であり、行はれざる家であり、生きた家にはならない。家は天照大御神の御分魂を戴いた祖先の靈の發展する家でなければならぬ。自己は此の靈の中から生れ、此の靈を發展させ、此の靈の中に死ぬ家であり、外観せられた他人の家は「行ふ」自己の家ではない。

教育勅語に「爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ」と仰せられてある「爾臣民」との御呼掛は、奉読する私に

仰せられたものであり、又奉読されるあなた自身に仰せられたのであり、漠然と抽象せられた臣民一般を指すのではない。「行ふ」自己に仰せられたのであり、他人事であつてはならぬのである。今、現に此処に天壤無窮の皇運を扶翼する私でなければならぬのである。父母に孝に兄弟に友に夫婦相和す家が、そこに於て行ふ自己の眞実の家であり、それ以外の家は考へられた家に過ぎず、行はれざる家に過ぎず、それは眞実の家に「成つてない」家なのである。

自己の行はないことは、未だ眞実に成つてないことであり、宇宙と一体になつてないことでなければならぬ。従つて他人の家に就て云つて見ても自己と対立する他人の家をあるものとして見てゐるだけであつてはならない。自己の体験体得体現する他人の家は、自己と同じ眞実の家に成ることが出来るのでなければならぬ。「行ふ」自己の立場に於ける家の学問は、自己の家も他己の家も、「みことのり」のまゝの眞実の家に成らす所に体現せられるのである。さもなくては自己がそこに於て行ふ生きた家を実現する学問とは云へない。

我々は皇国の中に於て、特に「行ふ」自己の立場に成らねばならぬことを強く感ずる。我々は自己のゐない国を集めて来て、抽象的に国の観念を立ててはならないのである。自己の外にある国は、通説の言ふ如く一定の領域の上に統治権の下に結合した人類の団体であると言へるかも知れないが、それは飽くまで観念の国であつて、自己がそこに於て死ぬことの出来る眞実の国ではない筈である。我々は国の中に生れ、国の發展の中に参加し、国の中に死ぬものである以上、国の為に死ぬことの出来る学問でなければ、眞の国家学と言へない筈である。

三

西洋に於ては先づ独立する個が考へられ、次に個と個との総合としての全体が考へられる。日本では全体が先にあつて、その中から個が生れると考へてゐる。西洋では買物に行つて釣銭を貰ふ時の出し方が日本とは逆で、右に述べた実践的立場の相違がはつきり感じられるさうである。例へば二円七十五銭の買物をして五円の札を出したとすれば、日本人なら先づ全体の五円を中心にとらへて、それから二円七十五銭を引き、二円二十五銭となると云ふので、最初に一円札を二枚、次に十銭貨を二枚、次に五銭貨を一枚と云ふやうに出すのである。所が西洋では買物の二円七十五銭を基として、先づ五銭貨を出して八十銭と云ひ、次に十銭貨を出して九十銭、又十銭貨を出して三元と云ひ、その後で一円を二度加へて之で五円に成ると云ふさうである。西洋では個を足したものが全体を造ると思ふのである。

個人を単位として男と女とが契約によつて夫婦と云ふ家を造り、個人が沢山集つて大統領を選んで国と成るものと思つてゐるのである。何時でも抜けようと思へば抜けられる家であり、国であるわけで、そこに於て自己の死ぬ家や国には成りえないわけである。

日本では先づ天之御中主神が宇宙を發願せられ、此の天之御中に国が成るのである。「アメ」と云ふ全体はそのまま一の中心であり、中心から生れると云ふことは全体の中に生れると云ふことと同じである。次に国の中に家が生まれ、家の中に人が生れる。天、国、家、人は「一つはらから」であり、常に一体の生成するのでなければならぬのである。自己は全体即中心に於て生れ、全体即中心に於て死ぬのであつて、人は家からも国からも天からも抜け出ることは出来ないのである。

自己は家の中に於て行ひ、国の中に於て行ひ、天の中に於て行ふ我であつて、常に家の我であり、国の我であり、天の我でなければならぬ。我と家と二つのものとして考へることの出来ないものでなければならず、家と国とも、国と天とも、常に一つになつて顯現されるのでなければならぬ。我と家と二つを抽象して考へることが出来るのは、今此処に行ひつゝある自己の外の我を考へてゐることに外ならない。宇宙の外に個立完成せる、生死と無関係の自己の知情意によつて我を考へてゐることに外ならない。「行ふ」自己は知情意によつて觀察せられ得る自己ではない。知情意を棄てることに於て、「家と我」は「家の我」に成るのである。我々が知情意を以て対象を見る間は、対象に於て行ふ自己は体現されないものである。「我」が「対象」と成り、「対象」が「我」と成るのは、宇宙の中に自己の知情意を棄てた時であり、自己の知情意が宇宙の知情意に飛躍する時である。

四

宇宙の中に「行ふ」自己は、総てを天之御中主神に帰一せしむる自己でなければならぬ。他と対立する自己を棄てると共に、自己と対立する総ての禍津毘が無くするのでなければならぬ。自己を生かさしめる生魂は天之御中主神の生魂でなければならぬ。天之御中主神の足魂が自己を充実具足せしめる自己の足魂でなければならぬ。天之御中主神の玉留魂が自己の直霊でなければならぬ。斯くして自己が天之御中主神に帰一する神魂は、天之御中主神が自己に顯現する高御魂でなければならぬ。万有は一つ一つその中に於て産靈の働きを現はす天之御中主神の事成る（異る）ものでなければならぬ。「異る」は一つの胞から事成るのであつて、対立ではなく調和である。対立す

る個を基本として綜合したものが一つの全体を形成するのではない。一つの全体即中心に於て個は異なる本性を發揮するのである。根本末梢同根一体であり、中心分派帰一体である。個は中心分派の秩序を成して親から生れるのであるが、斯様に中心根本の靈の神流れたものが自己に成ると云ふことは、全体の靈が自己に成ると云ふことと一体である。天之御中主神が自己に成るのであり、自己は天之御中に生れるのである。天之御中主神と我とのつながりは、無窮の中今に於ける産靈である。連続の無い相對立するものが、その矛盾を止揚し統一して連続關係を作るのではなく、天之御中主神の生産靈、足産靈、玉積産靈が自己に成るのであり、無窮の中今に於ける産靈以外に生成と云ふことを顯現するものはない。昨日の自己が今日の自己に成るのも、自己が昨日の自己でなくなるることによつて今日の自己になるのではない。昨日はそのまま今日に成るのでなければならぬ。昨日も今日も同じ中今でなければならぬ。同じ中今から昨日と今日とが事成る（興る）のでなければならぬ。自己の生魂、足魂、玉留魂は、昨日の自己と今日の自己とを「ことならせる」無窮の中今の天之御中主神の生魂、足魂、玉留魂でなければならぬ。

斯様にして万有の一つ一つが、無窮の中今に夫々異なる本性を發揮すべく、天之御中主神から生れ、家の中に、国の中に、天之御中に、自己でなければならぬ「行ずる自己」を実現するのである。従つて今此処で「行ふ」自己に於ては普遍妥当性と云ふことは真理ではない。誰にでもよいと云ふことは生命ある「行ふ」自己の立場ではない。自己でなければならぬ特殊調和性が真理として置換へられなければならぬのである。普遍妥当と云ふことを真理と思つてゐる間は、宇宙の中に「行ふ」自己は体现されない。夫々自己だけでなければならぬ特殊の調和する所に、宇宙の中に「行ふ」自己が体现されるのである。我々は従来の学問を思切つて棄てる所まで来なければ、天之御中主神と一体に成つて真理を体得、体现することが出来ないと言ふ外ない。

五

従来の学問では、個は宇宙から独立完成せる存在として究明されて来てゐるが、今此処では宇宙の中に自己だけが内的に統一して完成してゐると云ふことは考へることが出来ない。宇宙から個立する自己のみが觀念の上で完成出来るに過ぎない。自己は天之御中主神に帰一し、天之御中から「行ふ」自己を万有に体现することによつてのみ、普遍妥当的ではなく特殊調和的完成を見るのでなければならぬ。岐美二神の修理固成と云ふのは、御自身の直靈を万有に体现せられたことに外ならない。他己を完成せずんば已まざる直靈が「行ふ」自己の体现である。自己が天之御中主神の神秘の奥に入れば入る程、他己へ自己が体现し、他己が自己と成り、自己が他己となり、調和的生成が実現する。「行ふ」自己は従つて自己の修理固成であると共に、他己の修理固成でなければならぬ。眠れる他己の本性を發揮せしめるのが、自己の自性の發揮と成る。我々は自己の知情意が天之御中主神の知情意に飛躍することによつて、他己の本性を開くことが出来る。対象物の内面に潜んでゐる直靈を、自己が対象物の中に於て行ふのである。対象物がそのまま我に對立する対象物である間は顯はすことの無い直靈を、自己がその中に入つて顯はしてやるのである。即ち宇宙の中に没入する自己の発顯が新文化の創造となるのである。自己が対象となり、対象が自己となることによつて一の天之御中主神の産靈が顯現するのであり、之が修理固成でなければならず、宇宙の中に於て「行ふ」自己の立場に於ける科学でなければならない。

斯様にして天の真理は伊邪那岐伊邪那美二神の修理固成によつて、そのまま国に實現されたのである。天之御中主神の全一靈はそのまま、国の中心として高天原知らしめす天照大御神の大御心の中に包容せられてゐるのである。即

ち宇宙の真理を実現するのが皇国であり、世界に国を成すものは、天皇に帰一してをらなければ真の国になつてをると云へないわけである。外つ国は国稚く浮脂の如くして、くらげなすたゞよへるものであり、真の国に「成つてない」のであり、修理固成せられなければならないのである。皇国に於て、天皇の大稜威の中に於て「行ふ」自己は、家を国とし、国を天とする修理固成の中今に自己を体现しなければならぬ。全世界に於て、天、国、家、人が一体に成る八紘一字実現の受持の神として、万有をして真実ならしめる「行ふ」自己を今此処に体现しなければならぬ。万有の中に入つて万有の直霊を発顯せしめんとする常なる努力が自己の直霊を開発せしめる「行ふ」自己である。我々は今此処に宇宙の真理を抱いて死ねる自己と成らなければならない。常に、無窮の中今に、天之御中主神に「マキリカヘルノミタマ」の覚悟を持たねばならないのである。(昭和十七年六月)

第四 「生む」の垂示

伊邪那岐神、伊邪那美神の「国生み」に就ては、非常に深い意義が垂示せられてをって、是非とも明かにして置かねばならぬのであるが、それは古事記の続きを説き進んでから精しくお話することとして、今回は此の「国生み」の所から古事記に頭はされて来る「神を生む」と云ふ言葉の意味を間違つて解釈する者が多いので、念のため解説しておきたいと思ふのである。天之御中主神から岐美二神までは、神は皆「成る」とあり、岐美二神の国生みの所から「生む」と書かれてゐるのである。「成る」に就ては既に説いたことがあるので「生む」に就いて説いて置きたい。

最近、哲学者の間で外国の哲学から翻訳した言葉を避けて、日本語でものを考へようとする傾向が次第に現はれ、「なる」と「ある」、「うむ」と「つくる」、或は「むすび」と云ふやうな言葉が哲学の用語として盛に使はれてをり、存在、当為、創造と云ふ様な概念の究明を事としてゐた従来の哲学を「成る」、「生む」と云ふ立場から見直さうとして来てゐる。さうして「国生み」の思想が他の何れの国の神話にもない我が国特有のものである所に着眼して、新しい国家観の基礎を此の点に求め、延いては歴史観、文化観にも及ぼさうとしてをるわけである。誠に喜ばしいことであるが、彼等は「国を生む」と云ふ現象の特徴だけに止つて、天地初発神話の特徴に気付かぬのは遺憾である。天地開闢神話は何処の国にもあつて日本のみが特有でないとする点に誤りがあつて、国家観のみの特長を説くのに急にし

て、宇宙観と国家観との一致せる特異性に思ひ及んでをらない。天地初発神話が全く外国に類例を見ぬ特異のものであることがわかつて始めて国生みの特異性も理解出来るのである。天之御中主神が高天原に成ると云ふ宇宙観の中から国生みが出て来ないと、「生む」の意義を狭く人間的な子産みに解して了ふ怖れがある。

「生む」は「造る」とよく区別される言葉であるが、先づ、主体者が自己の外に素材を対象として持ち、之に働きかけて新しい形を与える場合は「造る」であつて「生む」から区別せられ、次には主体者が素材を持たない場合にも、新に出来るものが主体者と同じ主観客観をもつたものとして現はれず、単に主体者の創造の客体に止まる場合も「造る」であつて、「生む」から区別されるのである。机は木と云ふ素材が人の外の対象にあつて、之に働きかけるのであるから「造る」であり、外国の神話では宇宙創造神と宇宙との関係は斯様な意味の「造る」か、さもなければ神が無から万有を創造し万有は神の素質を受け継がず神の客体たるに止まる「造る」かのどちらかである。「生む」は主体が主体の内容そのまゝを客体に分泌し、客体が主体と同じ主体性をもつに至る場合を云ひ、親が子を生む場合のやうに親の外に素材がなく、親の中から出て来るのを云ふのである。日本の古典のやうに神が神を生むと云ふ中心分派、根本末梢の秩序統一を持つて生成する万神論は他の何れの国にもなく、外国では神の「みたま」の分泌が万有と成るやうには考へてをらなかったのである。

天之御中主神は御自身の外から材料を得、御自身の外に高天原を造つたのではなく、天之御中主神の全一霊の発露がそのまゝ高天原に成つたのであつて、天之御中主神と高天原とは二つの別の世界ではない。宇宙は主観すれば天之御中主神であり、客観すれば高天原であつて、天之御中主神と高天原とは主客分離して考ふべからざるものである。斯様に主客分離しえざる生成を「成る」と云ひ、靈魂の分泌が新に主観客観をもつたものを対象に分離して考へられ

る場合を「生む」と云ふのである。誰某は軍人に「成る」、子供は大人に「成る」、水は氷に「成る」であり、親は子を「生む」、鶏は卵を「生む」である。然し親から分離した子自身から見れば、矢張り分離しえざる主観客観をもつたものとして「成る」のであり、「生る」と書いて「ナル」と訓んでゐるので結局一の生成に帰するのであるが、人間から見てもやうに区別するわけである。神から見れば何れの場合も靈魂の分泌、即ち「むすび」であつて、神の内から成り、神の内を生む、一の生成である。我が古典は斯様な「成る」「生む」の生成思想で一貫せられてをり、「在る」「造る」と云ふことを背景とする外国の存在思想的文化観はどこにも見られぬのである。さうして日本語では「造る」と云ふのも、上に述べた客体の制作の意とは異なる主体の修理固成の意であつて神から見れば御自身の外に「作る」でなく、御自身の内を「修る」のであるから、矢張り靈魂の分泌に外ならず、「造る」は「生む」と反対の言葉ではなく「生む」の一型態を顯はす言葉と解すべきである。従つて修理固成は「生み修り、生み理め、生み固め、生み成す」と解すれば一層はつきりするわけである。即ち未完成のものを完成して行く、世々其の美を済して一代々々進歩発展して行く、「成るがまゝ」を「成るが上に成らしめ」て行く、神の靈魂の発露であり、天津神の命である。

二

岐美二神は天津神諸々の命もちて漂へる国を修理固成せられるのであるから、表から見れば岐美二神が修理固成の主体であらせられるのであるが、裏から見れば天津神総てが修理固成の主体であらせられ、天津神と岐美二神とは一体である。天津神総ての成り成りたる靈魂の結晶が岐美二神であらせられ、従つて漂へる国は単に岐美二神の修理固成の対象として存在する素材に過ぎないものではなく、天津神の「みたま」たる国と成るべき素源霊として岐美二神

の内に成り成りてあるものでなければならず、此の靈魂が又天津神の靈魂たる天沼矛を通じて岐美二神より分泌せられるのが国生みに外ならぬわけである。

岐美二神は群品の祖として、国土、山川草木、祖先民族悉くの直靈も、和魂も、荒魂もお生みになるので、其のお生みになる有様は万有個々の何から見ても自分の生れる有様に当筈まらなければならない。成り余れるものと成り合はざるものとの一体化によつてもが生れるのは、人間ばかりでなく動物も植物も鉱物も、更には風が起るのも水が流れるのも、皆此の原則に従ふのである。人間の直靈、和魂、荒魂の根源の神でもあることは云ふまでもないのであるから、人間から見れば夫婦が子を生むのと同じやうに考へ易いのであるが、石や水から見れば又夫々の生れ方と同じに考へるに相違ない。従つて岐美二神を單に人間的な直靈和魂荒魂のみを持った神として考へてはならない。如何に神とは云つても人間的な腹から島や山川草木をお生みになる筈はない。先に述べたやうに岐美二神は天津神諸々の成り成りたる宇宙全一靈としての天直靈の神であり、天沼矛も亦普通の和魂、荒魂をもつたものではなく直靈であつて、此の沼矛を通じて国土山川草木祖先民族のあらゆる靈魂が分泌せられるのである。それで万有皆岐美二神の靈魂の分泌としての主觀客觀をもつて生れて来るわけである。島も山川草木も皆靈魂である。従つて皆神としての名をもつてをり、伊予国が愛比売なら、讃岐国は飯依比古と云ふわけである。人間だけが靈魂をもつた子孫であるのではない、島も山川草木も皆靈魂をもつた子孫である。我々が若し我々の住む国土を生命のないものとして考へるなら、同じやうに人の体中に住む黴菌も人間を死んだ島としてしか考へないに相違ない。さうではなく何れも生きた岐美二神の靈魂でなければならぬのである。神は神を生むのである。従つて生れた万有は又万有を神として生む靈魂をもつて生れて来るのである。神が万有を「造る」と云ふ考へ方だと、造られるものは飽くまで神の客体たるに止まつて、神

と万有とは質を異にして主客隔絶するのであるが、「生む」の場合は神と万有とは質を同じくし、万有も神としての主觀をもつて生れるのであり、神の修理固成の客体即主体となるのである。

三

岐美二神の靈魂の分泌として生れる万有は、單に岐美二神の修理固成の対象として「造られた」客体に止まるのではなく、岐美二神と同じ修理固成の主体性をもつた神として「生れる」のである。我々は神の客体ではなく、神たる主体である。我々の主觀は天津神の修理固成の靈魂である。我々が自性を發揮することは、天津神が国を修理固成することと同じことを言葉を変へて言つてをるに過ぎない。我々が子孫を「生む」のも、文化を「造る」のも、天津神の稜威を發揮することに外ならない。我々は神によつて他律的に動かされてゐる客体でもなく、神を勝手に動かし得る自律的主体でもなく、神の稜威を發揮する主客未分の全律的「みたま」である。従つて我々の文化は天津神の「むすび」に参加することではなければならない。窮極は岐美二神と同じく、天照大御神の大稜威を顯すべき努力でなければならない。

「生む」は靈魂の分泌であつて神の働きであるから、荒魂としての肉体や物質の現象を究明する従来の學問によつては其の真相を明かにすることは出来ず、和魂としての知情意を究明する精神的學問も「生む」の外観は説明出来ても、實際に血を「生む」ことは出来ない。人が子を生む境地は知情意によつて左右し得るものでないのである。個々のものの荒魂、和魂を尺度とする時は有限なもののみしか見ることが出来ないのであるが、我々の全靈魂が神の靈魂として靈魂自身から自覺される時は天壤無窮に生きる直靈になるのである。直靈から自己が自己を生み、自己の「み

たま」が子の「みたま」となつて天壤無窮に生きるのである。荒魂、和魂の苦しみは限りがあるが直霊開顯の楽しみは窮りが無いのである。我々は知情意よりも奥の神そのまゝの直霊に成り全靈魂が岐美二神の根源霊に帰一することによつて、神の「むすび」の客体即主体となり、子のみならず万有を自己の「みたま」として生むことが出来、天壤無窮に生きることが出来る。岐美二神の「生み修り、生み理め、生み固め、生み成す」境地に帰一するのである。斯くして夫婦の間の子供のみならず、息も生れるものであることは云ふまでもない。言葉も我々さうして更に神の靈魂の分泌たる言霊であることがわかる。筆を通じては文章も絵画も靈魂の分泌として生きて来なければならぬ。我々の事業悉くが靈魂でなければならぬのである。人間から見れば御自身の内に「生む」のである。我々が直霊の神になるならば、機械も器具も「生れた」ものとして顯はれる。素材は人間の外の対象たる荒魂に止まる限りは直霊としての靈魂の発動を知ることが出来ないのであるが、神の包容の内なる靈魂として素材をも我々自身の内の素源霊と成すことによつて、神の恵みに人が参加し、稲は稔り、木は机となると云ふやうに、神と人として体なる一の「生む」神業が成就するのである。科学とは万有悉くが所を得て直霊を発動するやうに修理固成する努力である。発明発見とは素材の神性を知り、その直霊を生む神業である。

西洋の文化は「造る」思想によつて出来てゐるので、造られたものは人の客体たるに止まつて次のものを生む力を持たない。造形文化たる教会や寺院の建築は皆造られたなりに一代限りで朽ちて了ふのであるが、我が神宮の御建築は器械としての神の靈魂であるから生む力をもつてをられ、畏れ多いことであるが、式年遷宮によつて天壤無窮に伝はつてをられるのである。最も新しいものは最も古い「みたま」である。神は神を生み、生れた神は更に神を生むのであるから「生む」文化は天壤無窮である。日本は生れた国であるから無窮である。我々の芸術も事業も全靈魂を発

露結晶すれば千万年の後に伝はつて人を畏服せしめるのである。芸術も事業も靈魂をもつて生れ、靈魂を発動するのである。我々の仕事は天津神の御業であり、我々の全靈魂を以て神を顯はすことでなければならぬ。如何なる仕事も天照大御神の大稜威を顯はすべき神業でなければならぬ。我々は自己の仕事に天照大御神の大稜威を顯はすべく努力するのである。

斯くして天津神の「むすび」の御業に帰一して全靈魂を仕事に顯はす深さが文化、教養の基準となつて来なければならぬのである。天津神の御業に全靈魂を打込んだ人靖国の神達は最も教養の高い人達であり、死んだのではなく、天壤無窮に生きる神々である。我々は知的教養を以て文化の基準の如く思ひ誤らせられて来たが、それは西洋的な「造る」文化の基準であつて、一代限りで朽ちて了ふ生命なきものである。従来所謂学問のある人達が天業翼賛の志に欠ける所があつたのは、学問が「造る」を基準とし、「生む」を基準としなかつたからである。真の文化は天壤無窮を尺度とし、天津神の御業を顯はす生む文化の深さによらなければならぬ。学問すればする程、天照大御神に帰一し、天業翼賛に邁進するやうになるのでなければならぬ。一代限りの楽しみを追ふ米英人の方が、天壤無窮の皇運扶翼に参加するビルマ人やマライ人より文化の程度の低いことを世界に認めさせなければならぬ。之が文筆人や言論人の生む仕事であり、所謂思想戦も大東亜の文化政策も、天皇道が総ての基準となることを明かにして行くより外ないことを思はねばならぬ。(昭和十八年六月)